単元の指導計画

単元名　一　小説の言葉・詩の言葉

教材名　「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」「詩はいつでも近いところにある」

1　単元の目標

〔知識及び技能〕(1)ア、(3)イ　〔思考力、判断力、表現力等〕読ア・カ
「学びに向かう力、人間性等」

2　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
❶言葉には、想像や心情を豊かにする働きがあることを理解している。((1)ア) ❷人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めている。((3)イ)	❶文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えている。(読ア) ❷作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めている。(読カ)	進んで言葉には想像や心情を豊かにする働きがあることを理解し、文章の種類を踏まえて内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えようとしている。

3　指導と評価の計画（全５単位時間想定）

次	主たる学習活動	評価する内容	評価方法
1	●単元の目標を確認し、学習の見通しをもつ。 ●「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」を読み、「少女」は「少年の短い物語」をどのように受けとめたのか、話し合う。 ●表題にある「物語の効用」とはどのようなことだろうか、話し合う。 ●「少女」が「少年」に語る物語を創作する。	知識・技能 ❶❷ 思考・判断・表現 ❶❷ 主体的に学習に取り組む態度	行動の観察 記述の分析 行動の観察
2	●「詩はいつでも近いところにある」を読み、「言葉は、定められてしまうことから逃れようとしながら、それでも場所を得て、他の言葉を支えたり、あるいは飛び越したり、裏切ったりする」とはどういうことか、説明する。 ●「そのようにして、言葉と出会うことができる」とは、どういうことだろうか。「詩」の言葉についての筆者の考えをもとに説明する。 ●「詩はいつでも近いところにあるのだ」とは、どういうことか。今までに読んだことのある詩を取りあげて、話し合う。 ●単元の目標をもう一度確認し、学んだことを自分の言葉でまとめる。	知識・技能 ❶ 思考・判断・表現 ❶ 主体的に学習に取り組む態度	記述の確認 記述の確認 行動の観察

教科書
p.12～p.15

夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について

村上春樹

1 教材採録の意図

村上春樹の超短篇小説「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」を読んで〝物語の力〟について考える、これが本教材のねらいである。〝小説の言葉〟は日常会話の言葉とどう違うのか。あるいは薬の効能書きの言葉とどう違うのか。こういう問題を考えていくと、自然な流れとして、小説の読み方（というより楽しみ方）の問題に行き着く。小説の言葉とのつき合い方と言ってもよい。

そもそも小説を読むというのはどういう行為なのだろうか。語られた物語の内容を理解するということなのだろうか。登場人物の考えていることや感じていること、行動の背景を理解するということなのだろうか。そうなのかもしれない。あるいはここにさらに主題（あるいは作者の意図）を理解するという項目を加える人もあるかもしれない。実際、これまでの国語の授業では――これからもと言うべきかもしれない――そういうことを主要な内容としてきた。けれどもここではそういうこととは少し違う観点から小説の言葉とのつき合い方を提案してみたいと思う。それは何が語られているかではなく、いかに語られているかに着目して読むということである。それは端的に言って、語っているその言葉そのもの、その言葉の働き方に着目して読むということである。ひょっとしたらそれは何が語られているかに環流して、その何がを修正することになるかもしれない。実際、小説を読んで私たちが共有できるのは言葉が指し示すものではなくて（そこにはさまざまな解釈があるはずだ）、言葉そのものなのだ。物語内容という点で特段難しいところのない（ように見える）この小説は、言葉そのものに着目する教材としてうってつけであると言えよう。

2 作品の概説

❶ 作者

村上春樹（むらかみはるき）

一九四九（昭和二四）年～。小説家。京都府の生まれ。アメリカ現代小説の影響を受けた簡潔な文体、飛躍のある比喩、複雑な物語によって独自の小説世界を作りあげている。五十以上の言語に翻訳され、世界中に読者を持つベストセラー作家である。二〇〇九年のエルサレム賞受賞スピーチでは「もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。」と宣言、小説家としての自分の仕事を「個人の魂の尊厳を浮かび上がらせ、そこに光を当てる」ことと述べた。一九七九年「風の歌を聴け」で第22回群像新人文学賞、一九八二年『羊をめぐる冒険』で第4回野間文芸新人賞、一九八五年『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』で第21回谷崎潤一郎賞、一九九五年『ねじまき鳥クロニクル』で第47回読売文学賞、二〇〇九年『1Q84』で毎日出版文化賞など、数多くの受賞歴がある。フランツ・カフカ賞など、海外の文学賞も受賞している。『風の歌を聴け』『ノルウェイの森』「ドライブ・マイ・カー」は映画化された。レイモンド・カーヴァーやスコット・フィッツジェラルド、トルーマン・カポーティなどの翻訳でも知られる。

夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について

❷ 出典

村上春樹文・安西水丸絵『村上朝日堂超短篇小説　夜のくもざる』（一九九八年・新潮文庫）より「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」の全文。

❸ 表現上の特色

喩としての物語

「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」は、四〇〇字詰め原稿用紙にして三枚ほどのごく短い小説であるが、十分に村上春樹らしいところがあって、いろいろなことを考えさせてくれる作品である。ここではその中で、喩としての物語という問題を指摘しておこう。

少年の物語は、物語自体が一つの大きな比喩になっている。一般的な比喩の説明に倣って、喩えるもの（Y）と喩えられるもの（X）を整理すれば、「少女」（X）を「夜中の汽笛」（Y）に喩えているということになる。しかし、「少女」と「夜中の汽笛」との間にどのような類似性があるのか、これだけ見ていても見えてこない。二つの類似性を明らかにするのは「少年の物語」である。少年の用意した〈物語〉という場所で、少年とともに「鉄の箱」に詰められ、絶望の海の底に沈んでいかなければ「夜中の汽笛」を聞くことはできない。メタファとしての「夜中の汽笛」は〈物語〉と一つになったもので、それを離れて喩を構成するものではない。したがって、「夜中の汽笛」を理解するためには〈物語〉を読むほかない。少年にとって、少女への愛は〈物語〉という形でしか語れないものなのである。

一　小説の言葉・詩の言葉

3 参考文献

❶ 指導者のための参考文献

- 村上春樹『ノルウェイの森（上・下）』（二〇〇四年・講談社文庫）
- 村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです　村上春樹インタビュー集1997-2011』（二〇一二年・文春文庫）
- 村上春樹『村上春樹雑文集』（二〇一五年・新潮文庫）
- 村上春樹『職業としての小説家』（二〇一六年・新潮文庫）
- 加藤典洋『村上春樹の世界』（二〇二〇年・講談社文芸文庫）
- 芳川泰久・西脇雅彦『村上春樹 読める比喩事典』（二〇一三年・ミネルヴァ書房）
- 波瀬蘭『村上春樹超短篇小説案内　あるいは村上朝日堂の16の超短篇をわれわれはいかに読み解いたか』（二〇一一年・学研プラス）

❷ 学習者のためのブックガイド

- 村上春樹文／安西水丸絵『村上朝日堂超短篇小説　夜のくもざる』（一九九八年・新潮文庫）
- 村上春樹文／安西水丸絵『象工場のハッピーエンド』（一九八六年・新潮文庫）
- 村上春樹『カンガルー日和』（一九八六年・講談社文庫）
- 村上春樹『TVピープル』（一九九三年・文春文庫）
- 村上春樹・佐々木マキ『ふしぎな図書館』（二〇〇八年・講談社文庫）

4 学習指導の展開と評価

❶ 評価規準

知識・技能❶ 言葉には、想像や心情を豊かにする働きがあることを理解している。(1)ア
知識・技能❷ 人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めている。(3)イ
思考・判断・表現❶ 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えている。(読ア)
思考・判断・表現❷ 作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めている。(読カ)
主体的に学習に取り組む態度 進んで言葉には想像や心情を豊かにする働きがあることを理解し、文章の種類を踏まえて内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えようとしている。

❷ 学習指導の展開例　[3時間を想定]

時間	学習活動	指導上の留意点
第1時限 導入	1 全文を黙読し、疑問点や感想をメモする。 2 全文を音読する。 3 疑問点を発表し、教室で共有する。	●語句の意味や漢字の読みを確認させる。 ●どこに疑問を抱くかというところに学習者一人一人の個性が現れる。疑問点の共有は協働的な学習の出発点である。
展開1	4 少年にとって「夜中の汽笛」とは何だったか、説明する。 5 小説の語り手について理解する。 6 「女の子」「男の子」「少女」「少年」の使い分けにはどのような意味があるか、考える。 7 「そこにはきっと何かお話があるに違いない。」(12・3)とあるが、これは誰の判断か、考える。 8 この小説の地の文には過去形が用いられていない。そのことが小説にどのような印象をもたらしているか、考える。	●4は、少年の語った話の内容に沿って「夜中の汽笛」の意味を読み取る課題である。細部の読みに入る前に小説の内容を大きく捉えておく課題と位置づけるとよい。(発問例参照) ●5は、まず二種類の語り手について板書などを用いて解説し、その上でこの小説の語り手はどちらのタイプかを考えさせる。(板書例参照) ●6～8は、語り手を意識し、いかに語られているかに着目して読む課題である。(発問例参照)

	評価
次時と合わせて行う。 1 「少女」は「少年の短い物語」(14・13)をどのように受けとめたのか、話し合う。 課題A㈠ 2 「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」という長い表題の効果について話し合う。 3 「物語の効用」とはどのようなことか、話し合う。 課題A㈡	●1は次時の課題Bにつながる課題である。少女はどのような返事を期待していたのかを考えさせると、解答の幅が広がってくるであろう。 ●2・3は表題を読む課題である。この表題を不思議だ、あるいはおもしろいと感じるところから批評的な読みが始まる。初読時にこの点に触れた疑問や感想があれば、ぜひ教室で共有しておきたい。(発問例参照)

第2時限 展開2	評価
次時と合わせて行う。 1 「少女」が「少年」に語る物語を創作する。 課題B	●小説「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」では表題が重要な意味を持っているので、これに続ける少女の物語でもやはり表題に意味を持たせ、連作短篇のような形にするのが望ましい。 ●発表の形態は自作朗読会以外に、作品集の制作、原稿の回し読みなどがある。教室の事情に合わせて、ペンネームを使うなどの工夫があってもよい。

第3時限 まとめ	評価
2 自作朗読会を開いて、作品(「少女の物語」)を発表し合う。	知識・技能 1ア・3イ 評価の実際▼想像や心情を豊かにする言葉の力を理解するとともに、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めている。[行動の観察] 思考・判断・表現 読ア・カ 評価の実際▼小説という形式の構成や展開、描写の仕方などを的確に捉えたうえで、作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めている。[記述の分析] 主体的に学習に取り組む態度 評価の実際▼進んで言葉には想像や心情を豊かにする働きがあることを理解し、文章の種類を踏まえて内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えようとしている。[行動の観察]

5 教材の解説

❶ 大意

[200字] 少女に「どれくらい私のことを好き?」と尋ねられた少年は、物語で答える。夜中に目が覚めると自分はまったくのひとりぼっちで、世界から忘れ去られている、まるで鉄の箱に詰められて海に沈められているようだと思う。その時、遠くで汽笛の音がして、それを聞いているといつの間にか浮上し始め、この世界に戻ってくる、それは汽笛のせいだ、そしてその汽笛と同じくらい君のことを愛している、と少年は語る。次は少女が語る番である。(201字)

[100字] 少女に「どれくらい私のことを好き?」と尋ねられた少年は、夜中にひとり目覚めるときの絶望的な孤独感と、その孤独の底から救い出してくれる夜中の汽笛について語り、その汽笛と同じくらい少女を愛していると答える。(101字)

❷ 全体の構成

第一段 初め〜〜13・13「…少し間を置く。」	**「どれくらい私のことを好き?」** 少女に「どれくらい私のことを好き?」と尋ねられた少年は、物語で答える。夜中に目が覚めると自分はまったくのひとりぼっちで、世界から忘れ去られている、まるで鉄の箱に詰められて海に沈められているようだ、と少年は語る。
第二段 13・14「『でもそのとき…」〜終わり	**夜中の汽笛と同じくらい好きだ** その時、遠くで汽笛の音がして、それを聞いているといつの間にか浮上し始め、この世界に戻ってくる、それはみんなその小さな汽笛のせいだ、そしてその汽笛と同じくらい僕は君のことを愛している、と少年は語る。次は少女が語る番である。

❸ 展開図

文学国語へのいざない——小説の言葉——

① 〝何が語られているか〟から〝いかに語られているか〟へ
- 〈細部〉を読む

② 地の文の言葉を読む
- 語り出しには多くの情報が詰まっている
- 男の子・女の子・少年・少女（人物呼称）
- 〝過去形〟が現れない（時の表現）
- 小説の語り手にはどのようなものがあるか

コラム「文学を読むために　語り手」参照

③ 会話の言葉を読む——少年の物語
- 「夜中の汽笛くらい」——イメージの跳躍

★形のないものに形を与える

④ 物語への促し——少女の位置
- 「そこにはきっと何かお話があるに違いない。」

⑤ 表題を読む——「あるいは」の効果
- 〝物語の効用〟とは何か?——価値の反転

⑥ 小説を読むとはどういうことか
- 少女は「少年の物語」をどのように聴いたか
- 多様な解釈がある!
- 〈物語の力〉とは何か?

★物語という形でしか伝えられないものがある

❹ 語句・文脈の解説

12ページ

【通読して】

問 物語の語り手には、物語世界の外部にいる語り手（登場人物ではない語り手）の場合と、物語の登場人物が語り手になる場合とがある。この小説の語り手はどちらのタイプか。

答 物語世界の外部にいる語り手。

▼ 読者は語り手の言葉を通して物語世界を理解する。いかに語られているかを問題にするためには語り手の存在を意識しなければならない。

《板書例》

物語には二つのタイプがある

A 物語世界の外部にいる語り手が語る物語

B *物語の登場人物が語り手になる物語

*主人公とは限らない。

（注）小説の語り手と実在の人物である作家とは区別されるという点について注意を促したい（教科書44ページのコラム「文学を読むために　語り手」参照）。

【細部を読む】

1 **女の子が男の子に質問する。「あなたはどれくらい私のことを好き?」** 物語はこのように語り出される。ここで早くも読者は二つの問いの前に立たされることになる。一つは、なぜ「女の子」「男の子」なのかということであり、もう一つは、どうして「質問する」なのかということである。例えばもしこの小説の語り出しが次のようであったら、何がどう変わったのであろう。

少女が少年に質問した。「あなたはどれくらい私のことを好き?」

わずかのことであり、気にするほどのことではないかもしれない。好みの問題かもしれない。けれどもこうやって比べてみると、確かにそこに違いがあることがわかる。その違いの前に立ち止まること。立ち止まって考えてみること。そこから〈細部〉の読みが始まる。答えを急ぐのはやめよう。大事なことは、「違うね」と言って立ち止まることだ。あり得たかもしれない多くの可能性の中から一つを選び取る作家の、ほとんど無意識かもしれない選択の一つ一つに、小説とは何かということについての投げかけがある。その投げかけに、読者はその都度向き合いながら読み進めていくのだ。読むというのは、そういう際限ない作家と読者のキャッチボールなのである。

問「女の子」「男の子」「少女」「少年」の使い分けにはどのような意味があると考えられるか。

答「女の子」「男の子」という言い方が用いられるのは冒頭のみであり、二回目以降は「少女」「少年」になっている。この使い分けは、英語における a girl – she、a boy – he に該当すると考えられる。つまり、「少年はしばらく考えてから」の「少年」は「質問されたその男の子」を、「少女は黙って話の続きを待つ」の「少女」は「質問したその女の子」を指している、「少年」「少女」は人称代名詞の役割を果たしていると考えられる。

▼作中一箇所だけ「彼」という言葉が用いられているが（「彼は話し始める」12・4）、他はすべて「少年」「少女」が用いられている。これはすべてを「男の子」「女の子」にするわけにはいかないが、だからといって、「彼」あるいは「彼女」という言い方にすることもできないということである。「男の子」と「女の子」が会話をしているのであり、「彼」と「彼女」が会話しているのではない、英語ならば人称代名詞に置き換えて済むところが日本語ではそうはいかない、he や she の訳語として定着しているかに見える「彼」と「彼女」では、この小説の大事なところが伝わらない、だから「少年」「少女」という言葉が選び取られたのだと考えられる。

（補説）本教材の扱いとしては、あくまで小説の言葉とのつき合い方という一般論的な立場を守り、作家論に類することには極力踏み込まないように心がけたいと思うが、冒頭の一文の微妙なニュアンスに関わることでもあるので、少しだけ言及する。

村上作品には「女の子」という言葉がしばしば現れる。例えば——

女の子というのは実にいろんな可能性を思いつくものだと僕は感心する。
（「カンガルー日和」）

僕はあきらめて新聞を眺める。これまで女の子と議論して勝ったことなんて一度もないのだ。
（同右）

四月のある晴れた朝、原宿の裏通りで僕は100パーセントの女の子とすれ違う。
（「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」）

右の例の「女の子」は本教材の「女の子」より年齢はずっと上で、「女の子」の年齢には幅があることがわかる。これは村上作品に限ったことではなく、「女の子」という言葉は、「子ども」ではない女性に対しても用いられることはすでに辞書などにも説明されている通りである。ただし、右の「カンガルー日和」の例からもわかるように、男性の口から「女の子」という言葉が語られる場合には、相手は自分とは異なる原理で動く存在だ、よくわからない生き物だというニュアンスが伴うことが多い。いずれにしても、「女の子」という言葉は、対象を個としてではなくカテゴリーとして把握する語り手の意識を映しだしているということは間違いない。「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」の冒頭に戻ろう。「あなたはどれくらい私のことを好き?」という質問自体が、〈いかにも「女の子」のしそうな質問でしょう?〉という言外のメッセージを含んでいるように見える。〈ああ、あるね、そういうこと〉と読者に思わせるような語り方であるということである。

「私のヘア・スタイル好き?」
「すごく良いよ」
「どれくらい良い?」と緑が訊いた。
「世界中の森の木が全部倒れるくらい素晴しいよ」と僕は言った。
「本当にそう思う?」
「本当にそう思う」
（『ノルウェイの森（下）』第十章）

「女の子」の欲しがっているような答えを、しかも予想を超える答えを差し出す「僕」——もしこのような読み方が正しいとしたら、「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」の読者は、少年の物語をどのように読めばいいのだろうか。少年は物語の中で何を語ったのだろうか。こうして私たちはまたあらたな問いの前に立つことになる。

問小説の語り出しが「女の子が男の子に質問する。」ではなく、「女の子が男の子に質問した。」になっていたら、小説の印象はどう変わるか。

答「質問した」の場合には、過去の出来事として語られていることになるが、「質問する」の場合には、今、読者の目の前で（あるいは語り手の頭の中で）その出来事が起こるという印象になる。

▼小説の語り手は自分が知らないことについては語り得ない。そして、多くの場合、語り手が語るのはすでに起こってしまった出来事である。言うまでもなく、すでに起こってしまったというのは物語世界内の出来事としてということである（村上春樹の言葉を借りれば「物語という場所」で、ということになる）。その意味で、「女の子が男の子に質問する。」より「女の子が男の子に質問した。」という過去形を用いた書き出しの方が、確かにそういうことがあったのだという感じがして、出来事の輪郭は明瞭になる。小説の書き出しとしてもオーソドックスである。もっとも、小説はオーソドックスでなければいけないということではない。また、オーソドックスな小説では出来事を語る際に常に過去形が用いられるということでもない。実際、英語のような〝時制の縛り〟がない日本語では、過去の出来事であっても、それが今まさに目の前で起こっているかのように（つまり場面喚起的に）描かれる場合には、かなり自由に現在形が用いられる。右の発問は、このような小説における時の表現と語り方の問題に意識的な眼を向けることをねらいとするものである。ではその意識的な眼の先に何が捉えられるのか。残念ながらそれはこの発問の射程外である。それを問題にするには、もう少し小説を読み進んで、また別の問いを用意する必要があるだろう。

（補足）実はこの小説では所謂過去形が一度も用いられていない。何らかの意図があってのことと思われるが、明確なことは言えない。『夜のくもざる』にはこのような小説がいくつかある。

2 **少年はしばらく考えてから、静かな声で、「夜中の汽笛くらい」と答える。** 思いがけない答えが返ってくる。「夜中の汽笛」とは何だろうか。「夜中の汽笛くらい」とはどのくらいを言うのだろうか。あまりに唐突で、どこにも手がかりがない。このどこにも手がかりがないということが、ここでは重要である。問いと答えをいくら眺めても、両岸を架橋するものは見えない。隔たったものをつないでいるのは少年という存在そのものだからである。読者は、少年が語り出すのを待つよりほかないのだ。

（補説）こうした〝跳躍〟は村上作品の愛読者にはすでにお馴染みのものであるに違いない。『ノルウェイの森』に次のような一節がある。

「もっと素敵なこと言って」
「君が大好きだよ、ミドリ」
「どれくらい好き?」
「春の熊くらい好きだよ」
「春の熊?」と緑がまた顔を上げた。「それ何よ、春の熊って?」
「春の野原を君が一人で歩いているとね、

向うからビロードみたいな毛なみの目のくりっとした可愛い子熊がやってくるんだ。そして君にこう言うんだよ。『今日は、お嬢さん、僕と一緒に転がりっこしませんか』って言うんだ。そして君と子熊で抱きあってクローバーの茂った丘の斜面をころころと転がって一日中遊ぶんだ。そういうのって素敵だろ？」

「すごく素敵」

「それくらい君のことが好きだ」

（『ノルウェイの森（下）』第九章）

ここにも小さな物語がある。ただしその物語の味わいはかなり異なる。今我々が問題にしている「夜の汽笛」には、おねだりされて語る「春の熊」にはない、ある種の重さがあるように思われる。

3 **少女は黙って話の続きを待つ。そこにはきっと何かお話があるに違いない。** 少女が「黙って話の続きを待つ」のは、「そこにはきっと何かお話があるに違いない」と思うからである。既に見たように、「あなたはどれくらい私のことを好き？」という少女の質問と「夜中の汽笛くらい」という少年の答えとの間には少年が自ら明かさなければ決して埋められない溝（あるいは距離）がある。これは物語への促しである。問いと答えを結んでいるのは論理的な関係（因果関係）ではなく少年固有の物語（少年の物語）なのである。ここにこそ村上作品における物語の位置がある。

村上 僕は僕の心の中に深く暗い豊かな世界を抱えているし、あなたもまたあなたの心の中に深く暗い豊かな世界を抱えている。そういう意味合いにおいては、たとえ僕が東京に住んでいて、あなたがニューヨークに住んでいても（あるいはティンブクトゥに住んでいても）、我々は場所とは関係なく同質のものを、それぞれに抱えていることになります。そしてその同質さをずっと深い場所まで、注意深くたどっていけば、我々は共通の場所に――物語という場所に――住んでいることがわかります。

（『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです　村上春樹インタビュー集 1997-2011』）

少女は黙って話の続きを待つ。――促されて、物語は語り出される。それは個の深みに下りていく道であり、ずっと深い場所で他者に開かれている、希望に支えられた道である。希望なくして、どうして語り出されるだろう。

問「そこにはきっと何かお話があるに違いない。」とあるが、これは誰の判断か。

答 少女

▼「そこにはきっと何かお話があるに違いない。」は、少し後の「たぶんわかると思う。」同様、少女の内言（内言語 internal speech）であり、語り手が少女の内面を直接描きだしたものである。小説中、語り手が少年の内面を直接描いた箇所はない。語り手が少女の内言を描きだすのには理由がある。これについては「たぶんわかると思う。」のところで解説する。

4 **「あるとき、夜中にふと目が覚める」と彼は話し始める。「正確な時刻はわからない。たぶん二時か三時か、そんなものだと思う。……時計はとまってしまったのかもしれないな。** 「あるとき、夜中にふと目が覚める」――言葉とともに、もう一人の〝少年〟が立ち上がり、もう一つの世界が現れる。〈物語空間〉とは、言葉が作りあげる仮想空間（想像世界）のことであり、もう一人の〝少年〟――「僕」――は語り手である少年のアバター（分身）である。聞き手である少女は、〈物語空間〉という部屋に招待され、そこに座り、耳を澄ますことを求められる。「いいかい、想像してみてほしい。あたりは真っ暗で、なにも見えない。物音ひとつ聞こえない。時計の針が時を刻む音だって聞こえない――時計はとまってしまったのかもしれないな。」少女は、真夜中に、物音ひとつしない真っ暗な〈部屋〉

に、ひとり目覚める自分を想像する。

9 **そして僕は突然、自分が知っている誰からも、自分が知っているどこの場所からも、信じられないくらい遠く隔てられ、引き離されているんだと感じる。……それはまるで厚い鉄の箱に詰められて、深い海の底に沈められたような気持なんだよ。気圧のせいで心臓が痛くて、そのままふたつにびりびりと張り裂けてしまいそうな――そういう気持ってわかるかな？** 少年は、「愛」を語る前にまず孤独について語った。孤独は絶望的な距離に置き換えられて少女の前に（読者の前に）差し出される。「自分が、この広い世界の中で誰からも愛されず、誰からも声をかけられず、誰にも思い出してももらえない存在になってしまっていることがわかる。たとえ僕がそのまま消えてしまったとしても誰も気づかないだろう。」こういう状況は誰にとっても想像可能であり、追体験可能である。この絶望的状況は「それはまるで厚い鉄の箱に詰められて、深い海の底に沈められたような気持なんだよ。気圧のせいで心臓が痛くて、そのままふたつにびりびりと張り裂けてしまいそうな」でさらに具体的な、身体に訴えるイメージに置き換えられて、いっそう逃げようもないものになる。程度の差はあれ、だれにでも窒息への恐怖はあるだろう。叫んでも無駄だと考えるだけで身体に異変を生じてしまう。この感情が、少年の絶望に形を与える。世界からの隔絶が共有可能なイメージとしてそこにある。

13ページ

5 **――そういう気持ってわかるかな？」／少女はうなずく。たぶんわかると思う。** 少年は少女に確認する。少女は黙ってうなずく。「たぶんわかると思う。」は、すでに見た「そこにはきっと何かお話があるに違いない。」同様、少女の内言（内言語）である。それにしても「たぶんわかると思う」は微妙な言い回しである。語り手としては、ここで少女のうなずきが少年の「わかるかな？」に対する反射的なものではないこと、実際に少年の「気持」を少女なりに理解した上でのものであることを示す必要があった。というのも、これこそ物語の「効用」を読者の前に実証してみせるものであるからである。「少年の物語」は少女の心に届かなければならなかった。一方でそれは「たぶんわかると思う」というやや自信のないものである必要もあった。そうでなければ、なぜ少女はその絶望をそんなにも理解できるのかという少女の側の理由を読者に要求されかねないからである。少女は――ここでの少女はというべきかもしれない――読者が理解する程度に理解する必要がある。それはこの理解が少女の側の何か特別な経験によるものではなく、物語の持つ力によって得られる、いわば他者に向かって開かれたものである必要があるからだ。その意味で、少女は〝読者の代理〟なのである。

問「少女はうなずく。たぶんわかると思う。」とあるが、「たぶんわかると思う」という言葉があることの効果は何か。

答 少女の心の内を知り得る語り手が、少年の言葉が少女に届いていること、心に響いていることを読者の前に明らかにすることによって、物語の効用を視覚化するという効果がある。

▼「効果」を問う問題であることに留意する。「わかるかな？」と言われてうなずいているのであるから、「たぶんわかると思う。」がなくても少女が少年の言葉を受けとめていることはわかる。したがってここで問いが問題にしているのは、なくても伝わるところにあえてこの言葉が置かれていることの積極的な意味である。語り手には少女の心の内を読者に見せる必要があった。これはこの物語が「夜中の汽笛について」語る物語であると同時に「物語の効用について」語る物語でもあるということと関係している。語り手は、物語の「効用」を読者に見せようとしているのである。

7 **少年は続ける。「それはおそらく人間が生きている中で経験するいちばん辛いことのひと**

つなんだ。……それはたとえなんかじゃない。ほんとうのことなんだよ。それが真夜中にひとりぼっちで、目を覚ますことの意味なんだ。それもわかる？」 ここにも「あなたはどれくらい私のことを好き？」と同じ構図がある。愛と同じように、孤独の辛さも「どれくらいか」を言葉にすることが難しい。本物の感情の前にはどんな言葉も誇張に聞こえる。「ほんとうにそのまま死んでしまいたいくらい悲しくて辛い気持だ。いや、そうじゃない、死んでしまいたいというようなことじゃなくて、そのまま放っておけば、箱の中の空気が薄くなって実際に死んでしまうはずだ。それはたとえなんかじゃない。ほんとうのことなんだよ。」と少年は言う。「たとえ」が喩えに終わらず現実になるならば、確かにその感情が本物であることの証明になるだろう。だが、それはやはり物語の中にとどまる。物語を信じるかどうかは少女次第である。

13 **少女はまた黙ってうなずく。少年は少し間を置く。／「でもそのときずっと遠くで汽笛の音が聞こえる。それはほんとうにほんとうに遠い汽笛なんだ。……それはみんなその小さな汽笛のせいなんだね。聞こえるか聞こえないか、それくらい微かな汽笛のせいなんだ。そして僕はその汽笛と同じくらい君のことを愛している」** 少年にとって「夜中の汽笛」とは、世界から隔絶され、絶望的な孤独の中にある自分のもとに、その絶望的な距離を超えて届く希望の音であり、世界とのつながりを回復させ、「鉄の箱」を浮上させ、呼吸と鼓動を取り戻させるものなのであった。「汽笛」という言葉には「警笛」にはない不思議な力がある。蒸気機関車が私たちの前から姿を消して久しいが、にもかかわらずなのかそれ故なのか、「汽笛」は今もなお物語の中に鳴り続け、私たちの心を揺さぶっている。少年の物語は比喩で成り立っている。「鉄の箱」も「汽笛」も比喩であり、物語自体が比喩である。比喩は見えないものに形を与える。少年が用意した物語という部屋で、少女は「汽笛」を聞く。少女はその「汽笛」をどう聞いたか。

▼

問　少年にとって「夜中の汽笛」とは何だったか。

答　世界から隔絶され、絶望的な孤独の中にある自分のもとに距離を超えて届く希望の音であり、世界とのつながりを回復させ、生への帰還をもたらすものであった。少年の語った話の内容に沿って「夜中の汽笛」の意味を読み取る問いである。

問　「少年は少し間を置く。」（13・13）とあるが、なぜ間を置いたのだろうか。

答　「汽笛」の話をする前に敢えて少し間を取ることで、物語の劇的効果を高めることをねらったと考えられる。

▼

少年の行為の意味を考える問いである。本文に「間」の意味を明示する言葉があるわけではないが、そこに「間」がある以上、読者はその意味を問うであろう。「間を置く」という言い方は、それが意図的なものであることを示している。少年は〝語りの効果〟を計算している――そう感じさせる一文である。クライマックスを予感させる「間」と言ってよいであろう。

14ページ

13 **そこで少年の短い物語は終る。今度は少女が自分の物語を語り始める。** 少年の語り――それは実際には〝会話〟の形をとっているのであるが――既に一つの「物語」なのであった。「物語」には「物語」で応える。「あなたはどれくらい私のことを好き？」に始まる少年と少女の愛の交感は、こうして「物語」の交換になる。

【全体を通して】

問　この小説の地の文の文末表現には際だった特徴がある。それは何か。また、そのことが小説にどのような印象を持たせているか。

答　すべて現在形になっている（過去形が一度も用いられていない）。そのため、

少年と少女の会話が過去のある時点での出来事として語られるのではなく、今まさに読者の眼前で展開していることとして語られている。語り手までもが、今はじめてそれを聞く人のように、読者とともに少年の言葉に聞き入っている――そういう印象が生まれている。

▼

過去の出来事だから過去形で語るのだと考えられがちであるが、物語においては、過去形の使用が出来事を過去のものにするのであり、現在形で語れば、それは今まさに起こりつつあることになる。すべてを振り返ることのできる位置から語るのか、それとも眼前の出来事として語るのか、〈語りの位置〉を決めるのは語り手である。直接話法の会話で展開するこの小説は、基本的に場面喚起的な語り方がなされていると言ってよい。地の文の現在形はその効果を削がないように工夫されたものと見ることができる。

（補説）「物語」を言葉でできた〈部屋〉への招待と捉えるならば――実際、村上春樹は「遠くまで旅する部屋」（『村上春樹雑文集』所収）というエッセイの中で物語を作るという行為は自分の部屋を作ることに似ていると述べている――超短篇小説「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」が招き入れてくれるのは、「物語」という〈部屋〉のモデルルームのようなものなのかもしれない。そこにはいわゆる生活の匂いがない。「物語」という部屋の機能がよく見えるように、ところどころは透明になっているようにさえ見えるが――例えば、少女への愛と「夜中の汽笛」という遠く離れた二つものをつないでいるのが孤独な魂の物語であるという、そういう物語の仕掛けがよく見える――残念ながらという か当然のこととしてというか、そこには住んでいる人間の「闇」が染みついたような〝壁のしみ〟がない。「闇」が吐きだす〝毒〟がない。もっとも、だからこそ安心して、私たちは部屋を見て回ることができるのだが、ひょっとしたらそのことと、この小説の地の文が過去形を持たないということとはつながりがあるのかもしれない。おそらくこれは純度を高めて抽出された村上春樹的思考（「仮説」）の一つなのである。短い主題が複雑に変奏されて壮大な楽曲になっていくように、このモチーフはやがて大きな物語の中で反復され変奏されて、重さを増していくであろう（例えば『ノルウェイの森』のように）。少年が少年という枠をはみ出し、少女が少女という枠をはみ出し、それぞれの顔が見え始めると、引きずる「闇」も深くなり、心の地層も厚くなる。そうなればもはや現在形だけで語ることはできなくなる。しかし、それはまた別の小説の話である。

（註）**「仮説」について**　『村上春樹雑文集』所収のエッセイ「自己とは何か（あるいはおいしい牡蠣フライの食べ方）」の中で、小説家のなすべきことは結論を用意することではなく、「物語」というささやかな広場の真ん中に「仮説」を丹念に積み上げていくことだと述べている。

問　この小説には「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」という長い表題が付けられている。この表題の効果について、次の手順で考えてみよ。

(1)「あるいは」はここではどのような意味を表しているか。

(2)「効用」という言葉はここではどのような意味を表しているか。

(3)「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」という表題の効果を説明せよ。

答

(1) 接続詞の「あるいは」は、そのうちのどちらかという関係にある二つのものをつないで、「でなければ」「または」「もしくは」という意味を表す。ここでは「夜中の汽笛について」と「物語の効用について」を併置するこ

とによって、どちらの見方もあり得るということを示している。

(2)「効用」は、ききめ、効能、使い道、用途などの意味で用いられ、うまく用いると望ましい効果が期待できる、役に立つということを表す言葉である。ここでは「物語」には実用的価値があるということを表している。

(3)この小説は「夜中の汽笛」について語っていると見ることもできるし、「物語の効用」について語っていると見ることもできるとすることによって、一つの視点でのみ見ていると小説を読み誤るかもしれない、角度を変えるとまったく違うものが見えてくるかもしれないと、読者に注意を与え、再考を促す効果がある。

▼「夜中の汽笛」や「物語の効用」という言葉に目が行って見過ごされやすいが、この表題を読み解く手がかりは「について」にある。この表題は、この作品が何について語ったものなのかを説明するものであり、その見方は二つあるということなのである。読者にメタレベルの読みを促す表題であると言える。

（補説）村上春樹が「あるいは」を表題に用いた例を挙げておく。

「鉛筆削り（あるいは幸運としての渡辺昇①）」

「タイム・マシーン（あるいは幸運としての渡辺昇②）」

（右二篇『村上朝日堂超短篇小説　夜のくもざる』）

「飛行機――あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」

（『TVピープル』）

「自己とは何か（あるいはおいしい牡蠣フライの食べ方）」（『村上春樹雑文集』）

❺「課題」の解説

課題A

一「少女」は「少年の短い物語」（14・13）をどのように受けとめたのだろうか、話し合ってみよう。

解答例

①少年の孤独に触れた少女は、深く心を動かされ、何とか少年の期待に応えようと思った。

②思いがけず少年の孤独の物語を聞かされた少女は、正直戸惑っていた。「夜中の汽笛」にたとえてくれた少年の思いは嬉しいには違いないが、一方でどうして今までその孤独に気づかなかったのだろうとも思った。

③軽い気持ちで「どれくらい好き?」と聞いたのに、思いがけず重い話を聞かされたので、嬉しいと思う反面、とても受けとめきれないとも思った。

④少年の物語は理解できるものの、やはり少女には少し物足りなかった。そこには少女を必要としている自分（少年）の思いばかりがあって、具体的に少女をどう見ているのか、どんなところがどんなふうに好きなのかはまったく語られていなかったからである。

⑤「どのくらい好き?」という質問はこれまでにも何度かしたことがあって、その度に素敵なお話を聞かせてくれたけど、今回のはまた格別完成度が高かったので驚いている。

⑥なんて切なくて美しい物語なんだろうと思って、感心している。それが本当の話であってもなくてもかまわない。こんな素敵な物語を思いつくというだけで素晴らしいと思っている。

解説

少年が、「愛」を語る前にまず「孤独」について語ったという点に着目したい。少年の愛を理解するために、少年の孤独を理解しなければならない少女は、物語を聞いた後、どのような気持ちになったであろうか。少女への想いの切実さを喜ぶべきなのか、それとも悲しむべきなのか。それは、少年の物語を、少女への想いの深さを表現するためのたとえ話として理解すべきなのか、それともそれ以上のものとして（つまり少年の孤独の物語として）理解すべきなのかという問題である。解答例はあくまで参考である。自由に、楽しんで話し合ってほしい。

二　表題にある「物語の効用」とはどのようなことだろうか、話し合ってみよう。

解答例

①自分の心の世界を物語にし、そこに少女を招き入れることによって、自分の感じている孤独や少女への思いの切実さを少女に感じ取ってもらうことができる。そこに物語の有用性があるということではないか。

②愛という目に見えないものの大きさを伝えるためには、それを目に見えるものに置き換える必要があるが、それには物語は非常に役に立つということではないか。

③「どれくらい好きか」というような質問の場合、中途半端な答えでは少女は満足してくれないおそれがあるので、少年はできるだけドラマチックな物語を用意して少女の心を充たす必要があった。実際、少年の物語は役に立った、物語には使い道があるということではないか。

④二人で物語の交換をすることによって、普通に会話する以上の関係になって、互いの絆が深まるのだとすれば、これも物語の効用と言えるのではないか。

解説

「物語の力」ではなく「物語の効用」が問われていることに注意する必要がある。読者は物語の中で、もう一つの世界、もう一つの時間を生きることによって、他者の経験を自己のものとすることができる。もう少し慎

重な言い方をすれば、物語の中での経験を通して、読者自身の〝潜在的な物語〟が呼び覚まされ、それまで気づかずにいた自分の心の深層に下りていくことができるようになる。これが物語の力である（「読み深めるために」参照）。では「物語の効用」とは何だろうか。解答例①②は、物語を少年の内面世界の表現と見ている点で共通している。「物語の効用」を「物語の力」に近い意味に理解していると言える。これに対して③④は、物語の実用的価値に着目している。物語は実生活にこんなふうに役に立つ、こんな使い道がある、それが「物語の効用」であるということである。表題が「夜中の汽笛について」だけであったら、小説は少年の孤独にフォーカスしたものになって、その分重くなるであろう。そこに「あるいは物語の効用について」が加わることによって、物語を鮮やかに使いこなす少年という視点が生まれ、重いものが一気に軽くなる。そこにこの作家一流のユーモアがある。この問題については、発問例のところでも解説したので、そちらも併せて見ていただきたい。

（参考）「物語の効用」を核に展開する短篇小説を二つ紹介しておく。

・「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」（『カンガルー日和』一九八六年・講談社文庫）

・「鏡の中の夕焼け」（『象工場のハッピーエンド』一九八六年・新潮文庫）

課題B

「少女」が「少年」に語る物語を創作してみよう。

解説

実際に物語を作ってみることで、小説とはどういうものかを理解するという課題である。特に字数などの制限は設けていないが、教室での扱いなどを考慮すると、「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」と同じくらいの長さをめどにするのがよいかもしれない（二〇〇字程度）。以下、参考のために進め方を紹介する。

〈進め方〉

(1) 物語の構想をメモする。
　①少女は少年の物語をどのように受けとめたのか、自分の解釈を定める。
　②小説「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」に続くもう一つの小説（連作短篇小説）という形で物語を構想する。表題も付けて独立した作品にするが、最終的に「少年のことをどれくらい好きか」という質問に答える形になっていればよい。
　③村上春樹は、物語を作るのは自分の部屋を作って人を招き入れるのに似ていると述べている。どんな部屋（物語）を作って少年を招き入れるのか、少年の語った物語を参考にアイデアをまとめる。
　④物語の聞き手としての少年が果たす役割を決める。
(2) 構想メモを元に少女と少年の会話を書いて草稿にする。
(3) 草稿を読み直し、不自然な箇所がないか、伝わりにくいところがないか点検し、必要ならば書き直す。
(4) 草稿を元に清書する。
(5) 自作朗読会などの形で作品を発表する（ワード原稿を提出して作品集にする方法やグループごとに原稿を回し読みする方法などもある）。

❻ 読み深めるために

ずっと深いところで――目覚めながら夢を見る

村上春樹は小説を書くとはどういう行為かを説明する際、しばしば「地下階」の比喩を用いる（もう一つ下の階という意味で〝地下二階〟ということもある）。インタビュー集『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』から引用する。

村上　イメージをつかって、お答えしましょうか。仮に、人間が家だとします。一階はあなたが生活し、料理し、食事をし、家族といっしょにテレビを見る場所です。二階にはあなたの寝室がある。そこで読書したり、眠ったりします。そして、地下階があります。それはもっと奥まった空間で、ものをストックしたり、遊具を置いたりしてある場所です。ところがこの地下階のなかには隠れた別の空間もある。それは入るのが難しい場所です。というのも、簡単には見つからない秘密の扉から入っていくことになるからです。しかし運がよければあなたは扉を見つけて、この暗い空間に入っていくことができるでしょう。その内側に何があるかはわからず、部屋のかたちも大きさも分かりません。暗闇に侵入したあなたはときに恐ろしくなるでしょうが、また別のときにはとても心地よく感じるでしょう。そこでは、奇妙なものをたくさん目撃できます。目の前に、形而上学的な記号やイメージや象徴がつぎつぎに現れるんですから。それはちょうど、夢のようなものです。無意識の世界の形態のようなね。けれどもいつか、あなたは現実世界に帰らなければならない。そのときは部屋から出て、扉を閉じ、階段を昇るんです。本を書くとき僕は、こんな感じの暗くて不思議な空間の中にいて、奇妙な無数の要素を眼にするんです。それは象徴的だとか、形而上学的だとか、メタファーだとか、シュールレアリスティックだとか、言われるんでしょうね。でも僕にとって、この空間の中にいるのはとても自然なことで、それらのものごとはむしろ自然なものとして目に映ります。こうした要素が物語を書くのを助けてくれます。作家にとって書くことは、ちょうど、目覚めながら夢見るようなものです。それは 論理をいつも介入させられるとはかぎらない、法外な経験なんです。夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです。

『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです　村上春樹インタビュー集1997-2011』（二〇一二年・文春文庫）

個の深みに下りて行き、地下階のさらに下の階に下りて行き、そこで物語を汲み出す、それが小説を書くことだと村上春樹は語る。村上は、物語を頭の中で作るようなことはしない、自分がずっと深いところに下りていって、そこで物語を立ち上げると、その物語が他の人が持っている潜在的な物語と呼応するのだ、それが「共感力」であり、一種の魂の呼応性なのだと言う。だから、もし「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」の少女が（読者が）「少年の物語」に共感したのだとすれば、それは少女の中に（読者の中に）それに呼応する潜在的物語があるということなのだ。